

り捨て、必要情報の収集と中身を濃縮して提供することが要求される。図書館員には物の管理者から情報の中へ入り主題に対する知識が要求され、利用者に対するアドバイス、利用者教育がますます重要となる。

英国での調査の結果いわれていることは、短期またはある程度の間まではフルテキストの電子化への転換はないだろう。将来の状況では、図書や雑誌は図書館におかれ、従来の方法で利用されて

いくだろう。図書館に次の目玉商品であるレーザーカードがもっと使われるようになるだろうが、近い将来に伝統的な資料にとって変わることはないであろう。OPAC ( Online Public Access Catalog ) が全国どこからでもアクセスできることが望ましい。さらに図書館のコンピュータが大学内の他のコンピュータと互換性を持ち、ネットワークを通じて電子メールなどが使えるようになる、ということがいわれている。

## 《地域ネットワーク》

### 奈良教育大学図書館、 京大・学術情報センターと接続

昭和63年度、奈良教育大学附属図書館に電子計算機システム導入の予算が認められ、2月1日、近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク（センターは本学図書館）並びに全国の学術情報ネットワークへの接続を記念して、同大学に於いて、開通式が行われた。

式には、同大学、近畿北部地区国立大学図書館、電子計算機メーカーから合わせて51名が出席し、藤永学長および市川図書館長の挨拶、本学図書館の砂本部長および電子計算機メーカーからの祝辞のあと、システムの説明とデモンストレーションに移った。市川館長のスイッチオンにより、ディスプレイ端末に上記ネットワークへの開通のメッセージと、奈良の観光名物である鹿の絵が表示され、その後、学術情報センターと本学図書館の電子計算機システムを利用した目録検索が披露された。

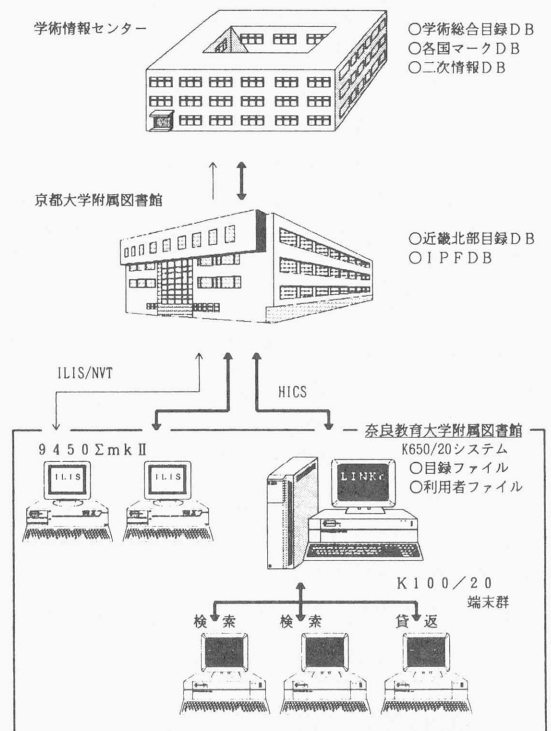
学術情報システムは全国の大学の参加の下に学術情報センターを中心に、大学の大型計算機センター（情報処理センター）、図書館、国立大学共同利用機関等をコンピュータと学術情報データ通信網で結合し、大学等の研究者が必要とする学術情報を迅速・適確に提供する、全国的・総合的な情報流通システムである。

この計画を達成するため、近畿北部地区（滋賀・京都・奈良）七大学図書館においても昭和56年に

は図書館間で組織を作り、地域ネットワークの構築を目指して活動を行ってきた。

同大学のシステム導入により、近畿北部地区国立大学図書館機械化ネットワーク参加館は、本学を除き四大学（京都工芸繊維大学、滋賀医科大学、滋賀大学、奈良教育大学）となり、残る二大学（京都教育大学、奈良女子大学）も近い将来参加する予定である。

ネットワーク構成概念図



提供：奈良教育大学附属図書館